

茨城県笠間市

宍戸城跡

—市道(友)2026号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2009

笠間市教育委員会

(有)毛野考古学研究所

茨城県笠間市

宍戸城跡

－市道(友)2026号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2009

笠間市教育委員会
(有)毛野考古学研究所

序

笠間市は、茨城県のほぼ中央に位置し、北西部には八溝山系が、南西部には愛宕山・難台山・館岸山が連なり、中央を北西部から東部にかけて涸沼川が台地を潤す自然豊かな地域です。また、河川流域や台地上より数多くの埋蔵文化財が確認されていることから、原始・古代より人々が生活を営むうえで最適の地域であったといえます。

今回の調査は旧陣屋地区の道路改良工事に伴う遺跡の発掘調査であります。この調査の結果、「宍戸城下絵図」に描かれている堀や城下に立ち並ぶ武家屋敷の存在を窺わせる井戸や木柱穴など、これまで不明瞭であった宍戸城の一部が確認され、地域の歴史を知る上で重要な資料を得ることができました。

この報告書を通して郷上の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化向上の一助として多くの人々に広く活用されますことを強く願っている次第です。

最後に、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大なるご指導・ご協力を賜りました関係機関並びに各位に対しまして心より感謝申し上げます。

平成21年3月

笠間市教育委員会教育長
飯 島 勇

例 言

1 本書は道路改良工事に伴い発掘調査が実施された、宍戸城跡の発掘調査報告書である。

2 調査は笠間市教育委員会の指導・委託のもと有限会社毛野考古学研究所が実施した。

3 遺跡の所在地・調査面積・調査期間は下記の通りである。

所 在 地 茨城県笠間市平町 2026 番地 外

調 査 面 積 500 m²

発 掘 調 査 期 間 平成 20 (2008) 年 10 月 29 日～同年 11 月 21 日

整 理 調 査 期 間 平成 20 (2008) 年 12 月 1 日～平成 21 (2009) 年 3 月 7 日

4 現地調査及び整理調査は(有)毛野考古学研究所 調査研究員 宮田忠洋が担当した。

5 事務局及び調査指導は以下の通りである。

事 務 局 笠間市教育委員会生涯学習課

調 査 指 導 宍戸城跡発掘調査指導委員会

川崎純徳 (茨城県埋蔵文化財指導員)

能島清光 (笠間市文化財保護審議員)

6 本書の作成に当たっては、内田恵美子・日沖美奈子・山口晶子の協力を得た。執筆分担は以下の通りである。

第Ⅰ章 第1節 笠間市教育委員会 第Ⅰ章 第2節・第2章～第6章 宮田忠洋

7 調査によって得られた資料は、笠間市教育委員会が保管・管理している。

8 発掘調査から本書の刊行に至るまで下記の方々にご指導・ご協力を賜った。記してここに感謝を申し上げる。(敬称略・順不同)

川崎純徳 能島清光 稲田義弘 中島直樹 増田 修 茨城県教育庁文化課

9 発掘調査の参加者は次の通りである。

青木 誠 岩田時彦 大平昭夫 大山年明 小坂部克己 小野瀬児 川又誠一 菅谷正義

根矢 稔 備海桂一

凡 例

1 遺構の詳細は一覧表に記載した。規模は中軸線状の壁の上端を計測し、半軸方向は長軸線が座標北に対して何度偏針しているかを記載した。また、深度については最も依存状態のよい壁の上端を基準としている。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は、以下の通りである。

SD : 溝 (堀) 跡 SE : 井戸跡 SK : 土坑 SX : 性格不明遺構 P : ピット

3 本書に使用した基本的な挿図の縮尺は以下の通りであり、これ以外については挿図中に明示した。

遺構： 溝跡 (SD) 1:60、1:80 井戸跡 (SE)・土坑 (SK)・性格不明遺構 (SX) 1:60

遺物： 上器・陶磁器 1:3 木製品・銅製品・瓦 1:3、2:3、1:4、1:6 古錢 1:2

4 山土遺物観察表中の計測値は()が復元値、〔 〕が残存値を示す。単位はcm、gである。

5 掘査した遺物には、遺構毎に番号を付しており、本文・挿図・表・図版とともに一致している。

6 挿図中のトーンは、塗付着範囲を示す。

7 上層觀察と遺物の色調は『新版標準上色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

目 次

序
例言
凡例
目次

第1章 調査の経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過と方法	1
第2章 位置と環境	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 遺跡の概要と基本層序	
第1節 遺跡の概要	5
第2節 基本層序	5
第4章 検出された遺構と遺物	
第1節 溝（堀）跡	7
第2節 井戸跡	12
第3節 土坑	13
第4節 性格不明遺構	15
第5節 ピット群	16
第6節 遺構外出土遺物	23
第5章 まとめ	25

写真図版
抄録

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	3	第12図 4号・5号J坑 (SK04・05)	
第2図 穴戸城想定図と調査区位図	4	平面・断面図および出土遺物	14
第3図 穴戸城跡 基本層序	5	第13図 1号・2号・3号不明遺構 (SX01・02・03)	
第4図 調査区全図 (S=1:400)	6	平面・断面図	16
第5図 1号溝(堆)跡平面・断面図	7	第14図 ピット群 (1)	17
第6図 1号溝跡 (SD01) 出土遺物	8	第15図 ピット群 (2)	18
第7図 3号溝跡 (SD03) 出土遺物	9	第16図 ピット群 (3)	19
第8図 2・3・4・5号溝跡 (SD02・03・04・05) 平面・断面図	10	第17図 ピット群 (4)	20
第9図 4号備跡 (SD04) 出土遺物	11	第18図 ピット (P) 川土遺物	21
第10図 1号井戸跡 (SE01) 平面・断面図 及び出土遺物	12	第19図 遺構外出土遺物 (1)	23
第11図 1号・2号・3号土坑 (SK01・02・03) 平面・断面図	13	第20図 遺構外川土遺物 (2)	24

表目次

表1 穴戸城遺跡周辺の中・近世遺跡一覧	3	表8 4号土坑 (SK04) 出土遺物観察表	14
表2 1号溝(堆)跡 (SD01) 山土遺物観察表	8	表9 土坑 (SK) 計測一覧表	14
表3 3号溝跡 (SD03) 川土遺物観察表	9	表10 性格不明遺構 (SX) 計測一覧表	15
表4 4号溝跡 (SD04) 出土遺物観察表	11	表11 ピット (P) 川土遺物観察表	21
表5 溝跡 (SD) 計測一覧表	12	表12 ピット (P) 計測一覧表	22
表6 1号井戸跡 (SE01) 出土遺物観察表	12	表13 遺構外山土遺物観察表	24
表7 井戸跡 (SE) 計測一覧表	12	表14 穴戸城跡出土土器・陶磁器種別集計表	25

写真図版目次

図1 本調査区より穴戸城木丸を望む (南西から撮影)	4号土坑 (北東から)
図版1 穴戸城跡の位置と周辺の地形	5号土坑 (西から)
調査区全景 (右が北)	1号不明遺構 (南から)
図版2 1号溝(堆)跡 (南から)	1号土坑 (北東から)
1号溝(堆)跡上層断面 (南東から)	2号不明遺構 (東から)
1号溝(堆)跡木製品 (堆)出土状況 (南から)	3号不明遺構 (東から)
1号溝(堆)跡 植物遺体検出状況 (北東から)	ピット群1 (北東から)
1号溝(堆)跡植物遺体断面 (南から)	ピット群2 (北から)
2号溝跡 (北から)	ピット群3 (南から)
3号溝跡 (東から)	1号ピット 本杭検出状況 (南から)
4号溝跡 (南から)	1号ピット 半截状況 (南から)
図版3 5号溝跡 (南から)	基本層序 (東から)
1号井戸跡 (西から)	穴戸城跡出土土器・陶磁器
1号土坑 (東から)	穴戸城跡出土銅製品・古鉄
2号土坑 (東から)	穴戸城跡出土木製品
3号土坑土層断面 (南から)	

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成18年4月26日、笠間市役所都市建設部道路整備課は、笠間市教育委員会教育長に対して、笠間市平町地内において計画されている市道改良工事における埋蔵文化財の所在の有無とその取り扱いについて照会した。これを受けて笠間市教育委員会は、水戸教育事務所の茨城県埋蔵文化財指導員である川崎純徳氏に調査を依頼し、平成19年1月10・12日に試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、堀跡と思われる黒色土層や盛上敷地面を確認し、笠間市教育委員会は笠間市役所都市建設部道路整備課あてに、事業地内に遺跡が所在する旨を回答した。

笠間市役所都市建設部道路整備課は、茨城県教育委員会教育長に対して、平成19年3月7日付けで宍戸城跡について文化財保護法94条第1項の規定に基づき、上木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘調査について通知した。茨城県教育委員会教育長は現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要と判断し、平成19年7月10日付けで工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

これを受けて、笠間市教育委員会は有限会社毛野考古学研究所に調査を依頼した。承諾後、笠間市教育委員会・笠間市・有限会社毛野考古学研究所は三者協議を行い、確認調査の結果に基づき、茨城県埋蔵文化財指導員の川崎純徳氏と笠間市文化財保護審議委員の能島清光氏を指導委員として平成20年10月29日から平成20年11月21日まで本調査を実施した。

第2節 調査の経過と方法

発掘調査は平成20年10月29日から11月21日まで行った。調査域の現況は水田であったため、表上除去後、調査区両壁にそって遺構確認面より深い側溝を人力にて掘り、適宜水中ポンプを使用して場外に向けて水抜き作業を行ながら調査を行った。遺構実測の縮尺は断面図はS=1/20を基本とした。遺構の撮影は適宜行い、35mmモノクロ、カラーリバーサルの各フィルムとデジタルカメラを使用した。

11月4日より遺構確認作業に入る。11月5日より、検出した1号溝（堀）跡の調査を開始するが從来の地盤の緩さから壁面の崩落が起こったため、同部分の調査を一時取りやめる。並行して溝・土坑・ピット群の調査を行い、11月12日より再度掘り位置を変更して堀跡の調査に入る。1号溝（堀）跡は同遺構内に直交する幅1mほどのトレンチを設定し、壁面の崩落に十分注意し、緩傾斜をつけながら掘り下げを行った。11月20日、ラジコンヘリによる遺跡の全景写真及び航空写真測量を行う。終了後各遺構の完掘写真を撮影する。11月21日、測量の捕捉を行い、すべての遺構調査を完了する。これを受け、11月25日、茨城県教育委員会文化課の視察を受ける。同日、器材を撤収し、発掘調査を終了する。

11月30日、遺物発見品・保管証などの発掘調査終了書類を関係機関に提出し、整理作業に着手する。整理調査は、平成20年12月18日から平成21年3月7日まで行った。遺物洗い・注記・検査・図面・写真整理へと進め、調査資料を分析して報告書としてまとめた。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

宍戸城跡の所在する笠間市は、平成18年3月に笠間市・友部町・岩間町の1市2町が合併して総面積240.27haの新たな市として誕生した。茨城県のはば中央部に位置し、北部は栃木県、西部は桜川市、東部は水戸市、茨城町、南部は石岡市、小美玉市に隣接している。笠間市の地形を概観すると、山地及び丘陵、台地、沖積低地に大別される。

北部は八溝山地が久慈川、那珂川等の河川により分断されてできた鷹足山塊の末端にあたる。その周縁の丘陵地帯は友部丘陵と呼ばれ、標高50～90mで広い平地を残している。丘陵を構成する友部層は更新世の海成砂礫層で上層に関東ローム層をのせており、南関東の多摩面に対比される。また、南西部は筑波山塊の最東端に位置し、愛宕山等を中心に起伏の高い複雑な山相で構成される。

中央から南東部は標高30～40mの大洗方面にまで及ぶ東茨城台地が位置する。基盤となる第三紀層は見和層上部層と呼ばれ、おもに砂層によって構成され上層に関東ローム層をのせている。

新市域の東茨城台地北側では友部丘陵を水源とする涸沼前川が北西から南東に、中央部では国見山付近を水源とする涸沼川が東流しており、これら流域には広大な沖積低地が広がり豊かな水田が拓かれている。

宍戸城跡は、これらに囲まれた小規模盆地を呈す新市域の中央やや東よりに位置し、旧行政区画では友部町大字平野に所在する。今回の調査区はJR水戸線宍戸駅の南方約500m、東流する涸沼川を南に臨む標高25～26mの沖積地上に立地しており、現況は水田である。

第2節 歴史的環境

宍戸氏及び宍戸城についてはこれまでに刊行された『宍戸城跡』『新善光寺・宍戸城跡』に詳しい。詳細は前2冊を参照していただき、本報告では笠間市域でも特に当遺跡の所在する旧友部町の中・近世の遺跡についてこれまでの調査結果をもとに概観する。

平安末期、旧笠間市・旧岩間町域を含む涸沼川流域一帯に九条家領莊園小鶴荘が成立する。この所領を寄進したのは平直幹と推定されているが、後に源氏が政権を握ると常陸國守護職であった八田知家の4男宍戸四郎左衛門尉家が宍戸を領し、建仁3（1203）年に山尾城（現在の新善光寺跡）（2）を築いてこの地方を治める。宍戸氏を称したことから、この地域は宍戸荘とも呼ぶようになる。宍戸氏は、15代義利の時に筑波48館の旗頭となり6万7千石を領し、その居館は古館（3）にあったと考えられている。

中世において常陸守護小田・宍戸一族は佐竹・江戸氏に対抗するため、宍戸城本城の周囲に多くの城郭を築いた。南東方向では湯崎城跡（28）や住吉城跡（25）があり、長毛路城跡（30）とともに宍戸城に出城的役割を担っていた。北方に位置する市原城跡（9）、御城遺跡（10）も小原から笠間への道筋における出城的役割として重要な點として築かれた。また、北東には里見氏の居城とされる小原城跡（7）が、東南方向には結城合戦（1440年）で武功をあげた横田綱利が居を構えた長峰城跡の推定地とされる上郷遺跡（21）があり、両袖にピット列が並ぶ溝2条が検出されている。

南東部では東海道と東山道の連絡路の一部である五方堀古道（32）があり、常陸國府から始まる古道の「安良駅家」から「河内駅家」間にあたる。両側溝を持って北東～南西方向に一直線に走向し、芯々距離8～10



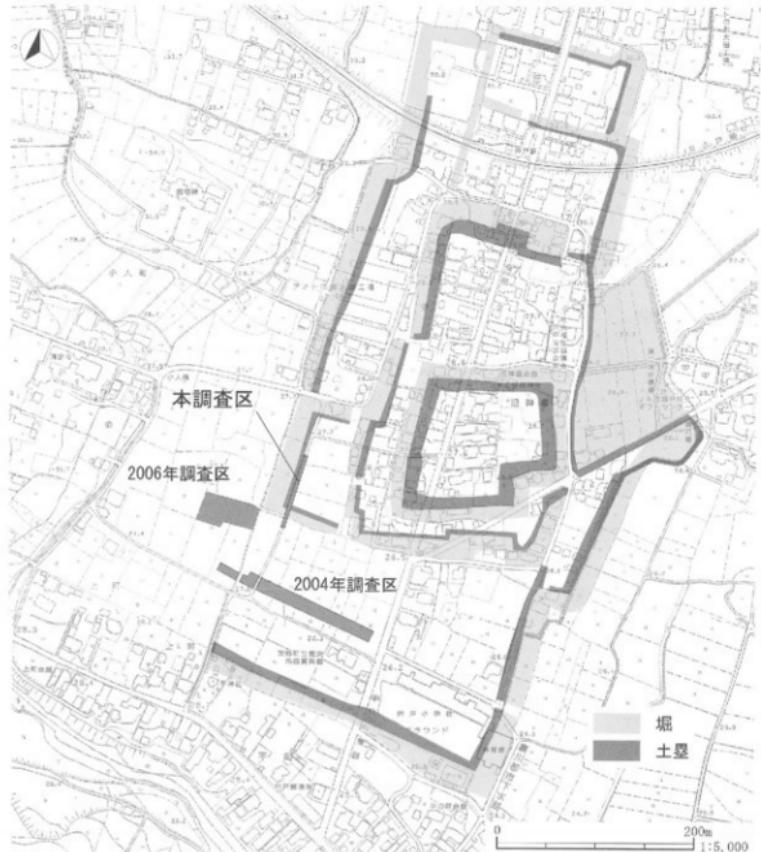
第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

表1 宍戸城遺跡周辺の中・近世遺跡一覧

番号	遺跡名	主な遺構・時代	調査年度
1	宍戸城跡	城郭 町指定史跡 (土壘のみ) (中・近世)	2004-2005調査
2	新善光寺 (山麓筑跡)	築跡 (中世)	2004 調査
3	古善光寺	築跡 (中世)	
4	大日山古墳群	塚 (近世)	
5	香取、板塚遺跡	内耳土器片出土 (近世)	1994 調査
6	四十八塚	築跡出土 (近世)	1998 調査
7	小原城跡	城郭 (中世)	
8	五平古墳群	塚 (近世)	
9	市原城跡	城郭 (中世)	
10	御城遺跡	城郭 (中世)	
11	丹後堀古墳	塚 (近世)	
12	大塚古墳	塚 (近世)	
13	北山遺跡	塚 (近世)	
14	完全寺後遺跡	中世陶器表採	1990-91調査
15	上加賀田遺跡	古墳地 (中世)	
16	下加賀田遺跡	古墳地 (中世)	
17	磨土台古墳群	塚 (近世)	1997 調査
18	堀の上塚群	塚2基 (近世)	1997 調査
番号	遺跡名	主な遺構・時代	調査年度
19	古善光道跡	溝跡、道路跡 (中世)	1997 調査
20	古善光道跡	溝跡 (中・近世)	1997 調査
21	上御遺跡	溝2条 (中世) 貴峰城跡 (推定)	1997 調査
22	寒小原遺跡	小糸氏船跡 (推定)	
23	佐那氏船跡	佐那氏船跡 (伝定)	
24	大吉山古墳	水路交通 (中世)	
25	行吉城跡	城郭 (中世)	
26	万那塚	經塚 (中世)	
27	千鶴塚	經塚 (中世)	
28	憲崎城跡	城郭 (中世) 町南定史跡 (木郭跡の?)	
29	剣塚	塚 (近世)	
30	長光寺跡	城郭 (中世)	1989 調査
31	久保塚	冢5基、土坑1基、清3条 (近世)	1998 調査
32	五万石古道	東海道・東山道・陸路跡	1999 調査
33	前原塚	塚 (古・近世)	1998 調査
34	仲丸遺跡	實永溫室・陶器器片出土 (中・近世)	1998 調査
35	向原遺跡	埴丘墓、塚 (中世)	1998 調査
36	磨土台古墳群	圓軌跡3基 (室町期)	1990 調査

mを測る。宍戸城南方には笠間街道が現在もその町並を残し、瀬沼川を利用した水路交通の痕跡がある大古山遺跡がある。

周囲には境界の明示や墓、信仰上のものとされる中世より残る塚が多く点在する。遺跡の分布は主に城郭あるいは古道周辺でよく残っており、中世では万部塚（26）や千部塚（27）、近世では大日山古墳群（4）、四十八塚（6）、坂の上塚群（18）、久保塚群（31）等があげられる。北山遺跡（13）の塚は境界塚とされており、仲丸塚（岡外）では石塔の空風輪が出土し、向原遺跡（35）で確認された墳丘墓には底部を打ち欠いた源法寺焼の甕が中央に埋葬されていた。また、室町期における生産遺跡である東原製鉄跡（36）では多量の排滓とともに円形炉が3基検出された。このほか香取、坂場遺跡（5）、完全寺寺後遺跡（14）では中世陶磁片や土師質土器が検出されており、生活の痕跡を垣間見ることができる。



第2図 宍戸城想定図と調査区位図(1/5,000『茨城県教育財団文化財調査報告 第256集』をもとに作成)

第3章 遺跡の概要と基本層序

第1節 遺跡の概要

宍戸城は一帯の宅地、工場、水田を含む地域で、かつては1,280,000 m²ほどの広さであった。旧陣屋である台地（標高約27m）が本丸跡で、宍戸駅に向かう北側により広く展開する北の丸跡が環郭式に開み、三重の堀を巡らせていた。明治22（1889）年のJR水戸線開通と駅の東側を通る岩間街道ができたとき城跡が分断・土盛りされたため、大きく改変され遺構はほとんど消滅してしまっている。現在では末広稻荷が鎮座しているところの本丸跡北側の上堀とその南方の土堤が一部残っているのみである。土堤の幅は西側に残る北の丸のものは5.4mで、本丸跡の南側は幅5.4m、高さ1.5m、長さ100mほどである。

宍戸城跡はこれまでに2次にわたって、ともに武家屋敷を中心として調査が行われている。

2004年調査では「宍戸城下絵図」に描かれる東西に走る通りに面した屋敷街の南部分が対象となり（2,913m²）、堀や溝によって区画された近世初頭の武家屋敷群が確認された。付随する池や井戸、門が検出されるとともに、近世に先行する掘立柱建物跡も発見され、宍戸城が中世に遡る可能性が指摘されている。出土遺物も豊富で、小皿、内耳鉢、上鍋などの土師質土器、火鉢や擂鉢の瓦質上器を中心に貿易・国内陶磁器類が多く出土し、特に池跡へ大量に廃棄されていた。

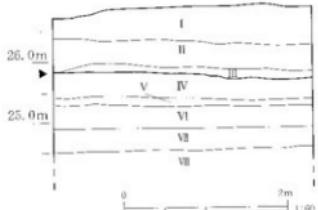
2006年調査では2004年調査区の北西、本調査区西側に近接する範囲（678.17m²）で調査が行われた。掘立柱建物跡2棟、溝跡12条、井戸跡4基、池跡2基、土坑16基、ピット26基が確認されている。調査区は溝に区画された3軒の武家屋敷を検出している。特に「宍戸城下絵図」にある「坂田權之助」200石の屋敷地に比定される箇所から石組井戸が検出されている。出土遺物は上師質土器、瓦質上器が半数近くを占めるが、茶碗をはじめとした豊富な陶磁器類も出土している。陶磁器では青磁蓮華文盤や染付皿・碗等の貿易陶磁器、瀬戸・美濃系を中心に唐津製品、肥前系磁器、常滑といった国産陶磁器が主体であった。

これらの調査結果により、宍戸城廃絶直前までの当時の豊かな暮らしぶりが窺える資料が得られている。

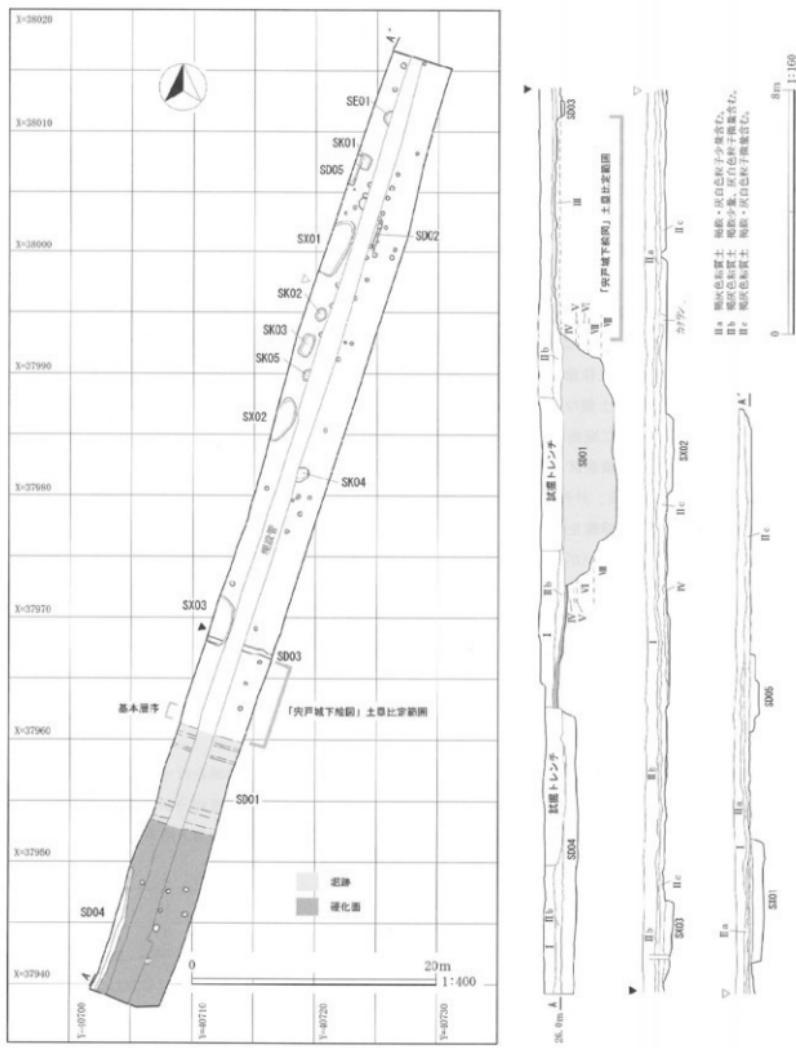
第2節 基本層序

本調査西壁及び1号溝（堀）跡の掘り込み面を対象として基本堆積土層の確認を行った。遺構確認はIV層上面で行った。II層は旧水田面で3層に細分される。III層の一部に砂層との互層部分があり、盛土構築面と想定される。IV層以下は自然堆積層であるが、堀の北側と南側では粗砂・細砂の混入の有無など若干の堆積状況が異なる。これは旧河川の影響と思われる。

- 基本堆積層 I 層波相
I 亂れ色無質土 10YR3/3
瓦状瓦片、焼灰灰量含む。しまりあり。粘性やあり。
II 焼灰灰質土
A 乱れ色無質土、灰白色灰土・焼灰少含む。しまり強い。粘性やあり。
B 焼灰灰質土
C 乱れ色無質土・焼灰少含む。しまり強い。粘性あり。
IV 焼灰灰質土 7.5YR4/1
焼灰等混入。灰白色灰子少紫、瓦狀・細砂を微混合し。しまり・粘性とともに強い。
V 焼灰灰質土 7.5YR4/1
粗砂・瓦質上にブロック大量。粗砂多量に含む。しまり・粘性とともに強い。
VI 砂質土質土 7.5YR4/1
粗砂多量の瓦層。しまり非常に強い。粘性強い。
VII 黒褐色土質土 7.5YR2/1
瓦質瓦片と粗砂の瓦層。しまり非常に強い。粘性強い。
VIII 混合砂質土
IX 混合砂質土
しまり非常に強い。粘性強い。



第3図 宍戸城跡 基本層序



第4図 調査区全測図 ($S = 1 : 400$)

第4章 検出された遺構と遺物

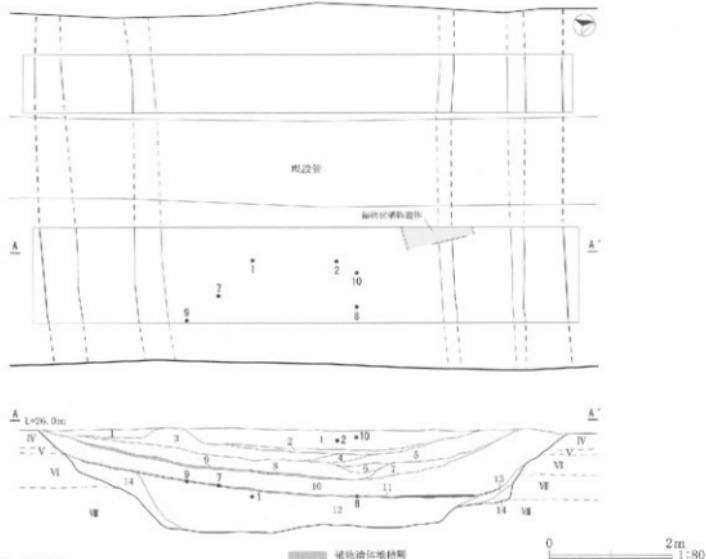
今回の調査では、溝（堀）跡 5 条、井戸跡 1 基、上坑 5 基、ピット群 4 か所、性格不明遺構 3 基が確認された。本調査区は「宍戸城下絵図」（正保年間に作成）によると東西に横断する堀と付随する土塁、堀と土塁内側に並ぶ武家屋敷の一部に該当する。以下、検出された遺構と遺物について記述する。

第1節 溝（堀）跡 (SD)

1号溝（堀）跡 (SD01) (第4～6図、表2・5／図版1・2・5・6)

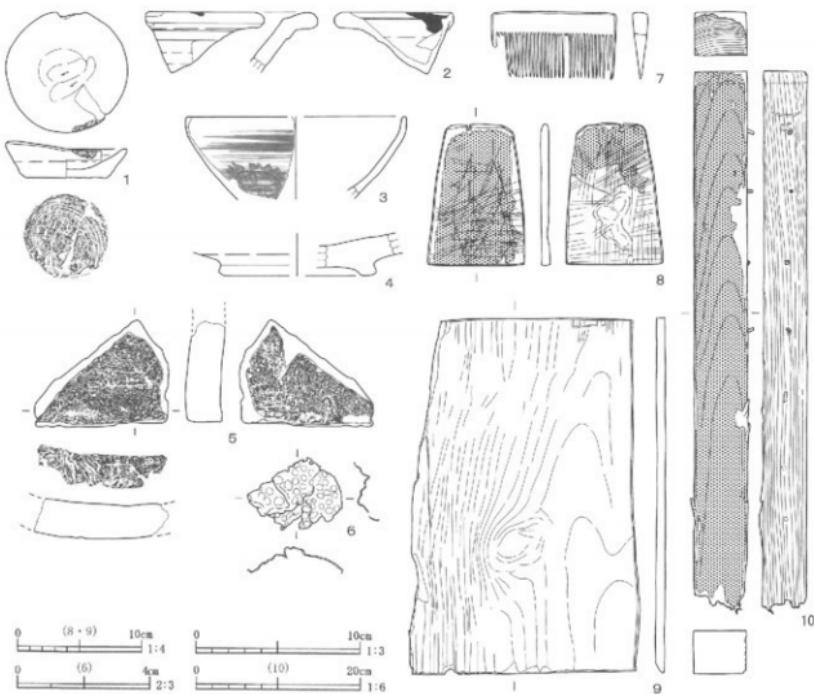
位置 X=37955～37970, Y=40705～40715 内に位置する。

規模と形状 トレンチ調査に止まるが、全長 6.0 m 以上で上端部 8.61 m、下端部 4.67 m、残存深度 1.71 m を測る。調査区を横断する様に N—109°—E へ直線的に走向している。断面形態は箱形を呈している。



- 1号溝（堀）跡 土質説明
- 1 にぶい褐色粘土 7.E97/3
褐色粘土を主体ににぶい褐色粘土ブロック及び灰白色粘土ブロックを大量に含む。しまり、粘性ともに無い。
 - 2 灰褐色粘土 7.E98/1
褐色粘土をブロックを多量に含む。
 - 3 灰褐色粘土 7.E98/1
褐色粘土をブロックを多量に含む。
 - 4 灰褐色粘土 7.E98/1
褐色粘土を主体に灰褐色細砂、白色砂子多量に含む。しまり、粘性とともに非常に無い。
 - 5 灰褐色粘土 7.E98/1
にぶい褐色粘土ブロック多量に含む。
 - 6 灰褐色粘土 7.E98/1
褐色粘土を主体に灰褐色細砂、白色砂子多量に含む。しまり、粘性とともに非常に無い。
 - 7 青灰色粘土 7.E98/1
褐色粘土を主体に青灰色粘土ブロックを多量に含む。

第5図 1号溝（堀）跡平面・断面図



第6図 1号溝跡（堀）跡（SD01）出土遺物

表2 1号溝（堀）跡（SD01）出土遺物観察表

番号	種別	断面	口径	周長	底径	粘土・礫混	色調	地成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
1	土師質土器	丸わらび	7.4	2.2	5.6	糞便石 雲母 砂粒	黒褐色	良好	ロクロ皮胎 同形系切削調査 見込み粉ナゲ 油懸付着	覆土中層	
2	陶器	鉢	—	(3.7)	—	灰褐色	黄灰	良好	外側鉄輪による草文	覆土上層	瀬戸・美濃
3	青花	碗	(13.2)	(5.0)	—	精良 透明白	灰白青	良好	外側青花文	覆土上層	明代
4	陶器	大鉢	—	(1.4)	[9.6]	灰褐色	赤褐色	良好	底部刷毛跡	覆土上層	瀬戸・美濃
番号	種別	断面	長さ	幅	厚さ	重量	粘土・材質	特徴	出土位置	備考	
5	瓦	平瓦	(6.6)	(8.0)	2.3	108.55	雲母 長石 石英	六面ナゲ 四面ナゲ 無面工具によるナゲ やや軟質	覆土上層		
番号	種別	断面	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考	
6	金瓦 製品	留め具?	2.2	2.9	0.03	0.37	銅	振り止め	覆土上層		
番号	種別	断面	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考	
7	木製品	簾	5.1	7.6	0.9	13.85	ツゲ木	平面方形 断面平坦 齧数32本 幅長2.7cm	覆土中層	人馬埋没最下層	
8	木製品	縦用板	11.6	7.8	0.68	53.65	—	板目 内外面無漆塗 朱墨で文様 裁直 織打旗	覆土中層	人馬埋没最下層	
9	木製品	高板	29.0	(18.6)	(0.7)	387.93	—	板目	覆土中層	人馬埋没最下層	
10	木製品	建築材	67.3	6.5	5.3	2250	—	板目 説教部角材と～れ柱間隙で木打ち込み 数量部以外墨塗装 生垣添しこみ底	覆土上層	南北に剥き立って出土	

覆土 12層からなる。上位層(1~11層)は人為堆積でにぶい橙色及び青灰色粘土ブロックを主体とする。4、6層では細砂層がみられ、9、11層は厚さ10cm程度の植物遺体堆積層である。7、8、10層堆積土はⅤ層に該当する。下位層(12~14層)は自然埋没である。

遺物出土状況 土師器皿片3点、志野目1点、肥前系磁器1点、鉄絵鉢1点、青花碗1点、木製品4点(櫛、俎板、真板、建築材)、銅製品1点が出土している。第6図1は12層、同図2・10は1層、同図7・8・9は11層直上から出土している。

所見 出土遺物や「宍戸城下絵図」に見られる場と一致していることから時期は17世紀前半と考えられる。上層の堆積土は土星の盛土であると考えられる。

2号溝跡 (SD02) (第4・8図、第5表/図版2)

位置 X=38005 ~ 378010、Y=40720 ~ 40725内に位置する。

重複 P21に掘り込まれている。

規模と形状 全長2.24m、上幅0.28m、下幅0.15m、残存深度0.05mを測る。N-17°-Eへ直線的に走向している。断面形態は箱形を呈している。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

覆土 単一層からなる。自然埋没と考えられる。

遺物出土状況 検出されていない。

所見 出土遺物がなく宍戸城下絵図にも描かれていないが、SD01内に位置していることから近世前半と推測される。

3号溝跡 (SD03) (第4・7・8図、第3・5表/図版2・5)

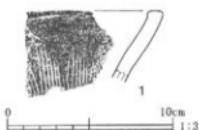
位置 X=37940 ~ 37975、Y=40710 ~ 40720内に位置する。

規模と形状 全長2.16m以上、上幅0.45m、下幅0.29m、残存深度0.16mを測る。N-108°-Eへ直線的に走向している。断面形態は箱形を呈している。底面はほぼ平坦で、壁は急な傾斜をもって立ち上がる。

覆土 単一層からなる。自然埋没と考えられる。

遺物出土状況 土師質土器片7点と鉢跡(第7図1)、不明土器が1点出土している。

所見 「宍戸城下絵図」には描かれていない溝跡である。SD01と主軸方向はほぼ同一である。SD01との間隔はおよそ8mで、「宍戸城下絵図」ではこの範囲に土壙が存在する。このことから、SD03はSD01と土壙に付帯する施設であることが考えられる。よって、SD01と同時期のものと考え17世紀前半と推測される。



第7図

3号溝跡 (SD03)

出土遺物

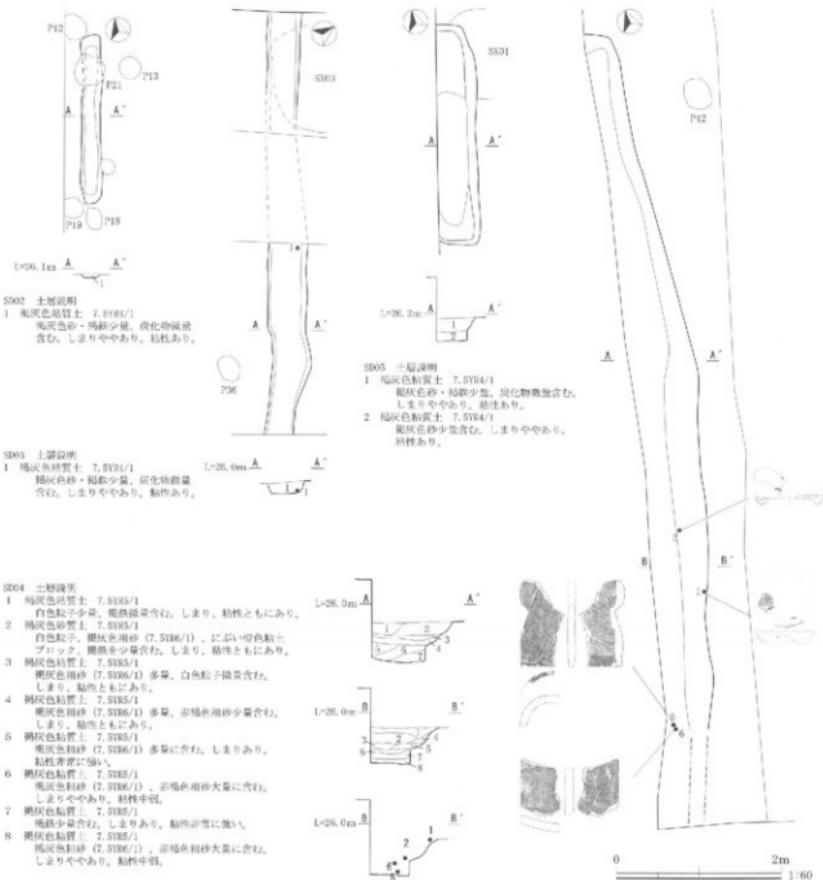
表3 3号溝跡 (SD03) 出土遺物観察表

番号	種別	剖面	口徑	断面	底径	胎土・釉薬	色調	構成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
1	土師質土器	柱状	—	(4.3)	—	赤土・陶器 鉢	にぶい黄褐色 砂利	良好	無釉	約1単位の掘り目	底面直上 在堆积

4号溝跡 (SD04) (第4・8・9図、第4・5表/図版2・5・6)

位置 X=37940 ~ 37975、Y=40700 ~ 40710内に位置する。

規模と形状 全長10.55m以上、上幅1.18m、下幅0.70m、残存深度0.49mを測る。N-16°-Eへ直線的に走向している。底面はほぼ平坦で、断面形態は下段は中段まで急に立ち上がる箱形、上段は緩やかに立ち上がる漏斗状を呈する。



第8図 2・3・4・5号溝跡 (SD02・03・04・05) 平面・断面図

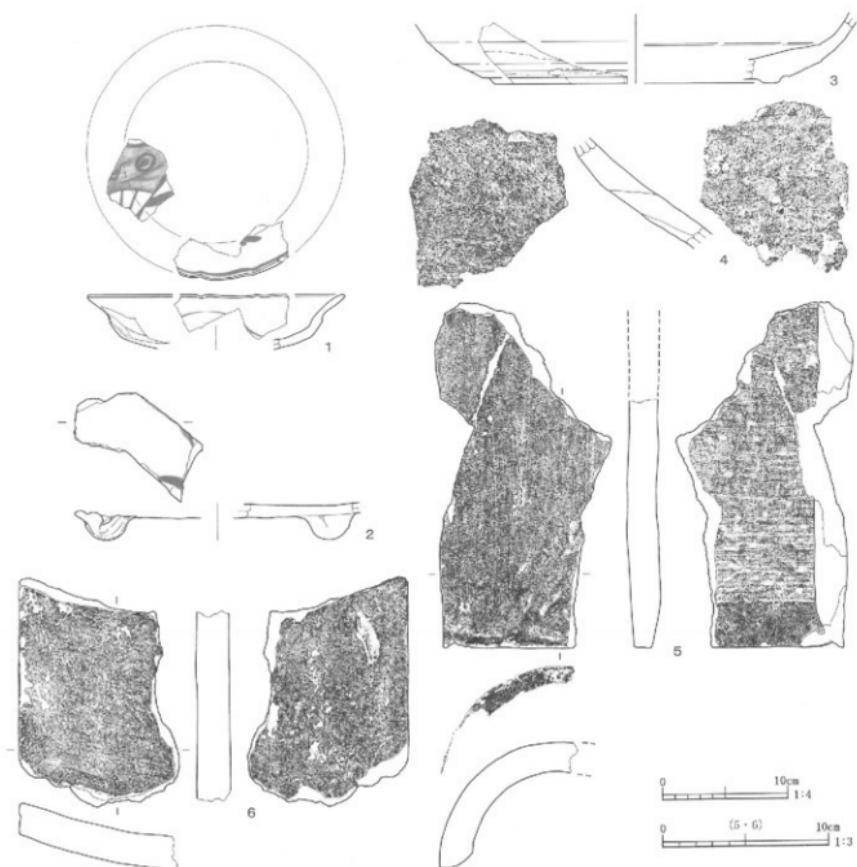
覆土 8層からなる。自然堆積と考えられ、砂粒と褐鐵鉱を含む粘質土の堆積の間に砂層が入る。

遺物出土状況 土師質上器片5点、瓦質土器片(風炉)1点、漸戸・美濃3点(志野織部皿・赤織部向付・擂鉢)、常滑1点(大甕)、瓦2点出土している。第9図1は櫻上層、同図2・5・6は覆土中層から下層で検出されている。

所見 「穴戸城下絵図」には描かれていないが、出土遺物から17世紀前半と考えられる。また、配置から2004年調査におけるSD02、2006年調査のSD02との関連性が指摘される。

5号溝跡 (SD05) (第4・8図、第5表/図版3)

位置 X = 37010 ~ 37015, Y = 40720 ~ 40725 内に位置する。



第9図 4号溝跡(SD04)出土遺物

表4 4号溝跡(SD04)出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	断土・油脂	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
1	陶器	皿	「15.5」	(3.3)	—	長石釉	淡黄	良好	擦絆による草花文、墨文、志野縞部	擾土上層	瀬戸・美濃
2	陶器	鉢	—	(2.2)	—	長石釉	に赤い粒	良好	内付跡、底部内面に鉛鉱、赤鐵鉱	擾土中層	瀬戸・美濃
3	陶器	擂鉢	—	(4.3)	[17.0]	灰釉	淡黄	良好	削り出し高台、溝台に砂目感、底部周辺擦絆、部分的に底面と側面に擦絆	擾土上層	瀬戸・美濃
4	陶器	甕	—	(6.0)	—	石英 白色粒	灰褐 に赤い粒	良好	外表面自然株、上位斜面、下位横腹へラナデ、内面粗粒灰、横腹へラナデ、内面擦絆底	擾土上層	常滑

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	粘土	特徴	出土位置	備考
5	瓦	丸瓦	(21.1)	(11.6)	2.0	603.32	玄母 石英 白色粒	凸面ナゲ 回面凸面ナゲ ナゲ 側面ナゲ 表面擦絆	擾土中層	
6	瓦	平瓦	(13.6)	(9.7)	2.0	333.92	玄母 石英 白色粒	凸面ナゲ 圓面ナゲ 側面ナゲ 斜面貼合せ目 表面擦絆	擾土下層	

規模と形状 全長 2.16 m、上幅 0.52 m、下幅 0.32 m、残存深度 0.30 m を測る。N - 18° - E へ直線的に走向している。断面形態は箱形を呈している。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がり、一部で中段から上端にかけて緩やかに立ち上がる。

覆土 2層からなる。自然堆積であり下層は砂層が見られる。

遺物出土状況 検出されていない。

所見 「宍戸城下絵図」では描かれていないが、堀内側の屋敷の付帯施設とすれば時期は 17 世紀代と考えられる。

表5 溝跡 (SD) 計測一覧表

遺構名	位置 (座標値)	断面形態	規模 (cm)			主軸方位	備考 (直接関係)
			長軸 (全長)	短軸 (幅)	残存深度		
SD01	X = 37955 ~ 37970 Y = 40705 ~ 40715	箱形	1000 以上	560	171	N - 109° - E	
SD02	X = 38005 ~ 38010 Y = 40720 ~ 40725	箱形	224	28	5	N - 17° - E	P21 と重複 (古)
SD03	X = 37940 ~ 37975 Y = 40710 ~ 40720	箱形	216 以上	45	16	N - 108° - E	SN03 と重複 (古)
SD04	X = 37940 ~ 37975 Y = 40700 ~ 40710	箱形	1055 以上	[1.18]	49	N - 16° - E	
SD05	X = 37010 ~ 37015 Y = 40720 ~ 40725	箱形	216	(52)	30	N - 18° - E	SK01 と重複 (古)

第2節 井戸跡 (SE)

1号井戸跡 (SE01) (第4・10図、第6・7表/図版3)

位置 X = 37015 ~ 37020, Y = 40725 ~ 40730 内に位置する。

規模と形状 上幅長軸 1.13 m を測り、円形を呈すると推測される。湧水と埋没土崩落のため底面を検出することができなかったが、残存深度は 1.1 m 以上である。断面形態は開口部へ向けて緩やかに広がる円筒状を呈する。

覆土 埋没土崩落のため観察できなかったが、上層は粘土質を含む人為埋没で中層以下は自然堆積であった。

遺物出土状況 上層から中層にかけて遺物が認められ、土師器且片 14 点、銅製品 (第10図1) が1点検出されている。

所見 「宍戸城下絵図」には描かれていないが、出土遺物と堀内であることから時期は 17 世紀前半と考えられる。

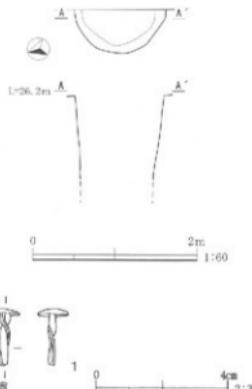


表6 1号井戸跡 (SE01) 出土遺物観察表

第10図 1号井戸跡 (SE01) 平面・断面図及び出土遺物

番号	種別	個数	長さ	幅	厚さ	重量	地盤・材質	特徴		出土位置	備考
								鉢	瓶		
1	漆器皿	鉢?	1.7	0.3	0.2	0.69	粘土	鉢	瓶	覆土中層	

表7 井戸跡 (SE) 計測一覧表

遺構名	位置 (座標値)	平面形態	規模 (cm)			壁面	備考 (直接関係)
			長軸 (全長)	短軸 (幅)	残存深度		
SE01	X = 37015 ~ 37020 Y = 40725 ~ 40730	円形	113	(63)	110 以上	直立	

第3節 土坑

1号土坑（SK01）（第4・11図、第9表／図版3）

位置 X=38010～38015、Y=40720～40725内に位置する。

重複関係 5号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸1.19m、短軸は1.07m（推定）の隅丸方形を呈する。

残存深度は0.28mで、箱形の断面形態を呈する。長軸方位はN-18°-Eである。

覆土 3層からなる。それぞれしまり、粘性が強く明褐色灰色粘土ブロックを2層に含む。

遺物出土状況 土師質土器片（擂鉢）が1点覆土中より出土している。

所見 時期は、出土遺物から16世紀末から17世紀初頭と考えられる。

2号土坑（SK02）（第4・11図、第9表／図版3）

位置 X=37995～38000、Y=40720～40725内に位置する。

規模と形状 長軸1.06m、短軸0.86mの橢円形を呈する。残存深度0.20mを測り、箱形の断面形態を呈する。長軸方位はN-17°-Eである。

覆土 1層からなる。褐色砂であり、自然堆積と考えられる。

遺物出土状況 検出されていない。

所見 時期は不明である。

3号土坑（SK03）（第4・11図、第9表／図版3）

位置 X=37990～38000、Y=40715～40720内に位置する。

規模と形状 長軸1.83m、短軸0.93m、残存深度は0.23mを測る。平面形態は長方形を呈すると思われ、底面はゆるやかな斜度を持つがほぼ平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-15°-Eである。

覆土 2層からなる。下層は褐色砂で自然堆積と考えられる。

遺物出土状況 検出されていない。

所見 時期は不明である。

4号土坑（SK04）（第4・11・12図、第8・9表／図版3・5）

位置 X=37990～38000、Y=40715～40720内に位置する。

規模と形状 長軸1.22m、短軸0.94m（推定）、残存深度は0.39mを測る。平面形態は隅丸方形を呈し、底面はほぼ平坦で、壁面は垂直に立ち上がる。長軸方位はN-25°-Eである。

覆土 6層からなる。堆積状況から人為埋没と考えられる。5層に褐色砂を含む。

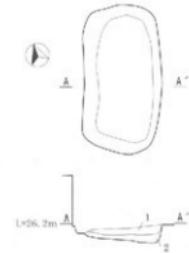
遺物出土状況 土師質土器片6点（皿6）が出土している。第12図1は



- 1号土坑（SK01） 土層説明
1 褐褐色粘土質土 7.6735/1
褐色砂質、白色砂子多量含む。しまり、粘性ともにあり。
2 褐褐色粘土質土 7.6736/1
褐色砂質土（伊豫瓦等）ブロックを大量に含む。
しまり、粘性ともにあり。
3 褐褐色粘土質土 7.6736/1
白色粘子少量含む。しまり、粘性ともにあり。



- 2号土坑（SK02） 土層説明
1 褐褐色砂 7.5044/1
褐灰色砂質（7.5046/1）の堆積。褐灰色粘土ブロック（径1～5cm）少量含む。しまり中弱、粘性なし。



- 3号土坑（SK03） 土層説明
1 褐褐色粘土質土 7.5044/1
褐灰色砂質ブロック（径5～10cm）を多量、褐灰色砂質を少量含む。しまりあり。適性中弱。
2 褐褐色砂 7.5044/1
褐灰色砂質を少量含む。しまりややあり。粘性なし。



第11図 1号・2号・3号土坑
(SK01・02・03)

平面・断面図

覆土上層から逆位で検出された。

所見 時期は、出土遺物から16世紀末から17世紀初頭と考えられる。

5号土坑 (SK05) (第4・12図、第9表/図版3)

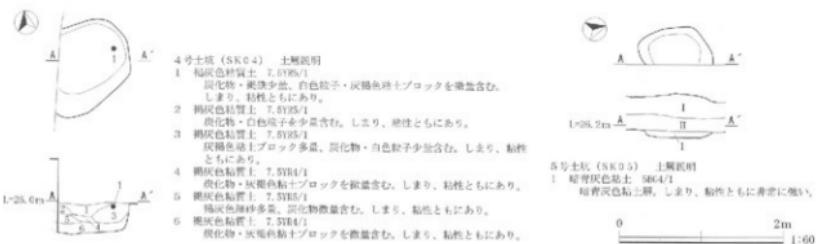
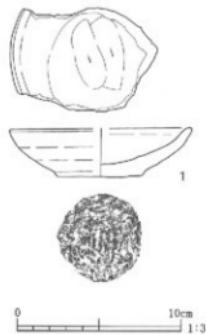
位置 X=37995 ~ 38000, Y=40715 ~ 40720 内に位置する。

規模と形状 長離 0.96 m (推定)、短軸 0.70 m (推定)、残存深度 0.07 mを測る。平面形態は長方形を呈すると思われ、底面はほぼ平坦で、壁面は垂直に立ち上がる。長軸方位はN-22°-Eである。

覆土 1層からなる。暗青灰色粘土で埋め戻されている。

遺物出土状況 検出されていない。

所見 時期は不明であるが、壙と同様に暗青灰色粘土で埋め戻されていることから17世紀前半と考えられる。



第12図 4号・5号土坑 (SK04・05) 平面・断面図および出土遺物

表8 4号土坑 (SK04) 出土遺物観察表

名	種	器種	口径	高さ	底径	壁上・施	色調	成	手	文様の特	出土位	考
1	土師質土器	かづら	[19.9]	3.0	6.5	素	淡黄褐色	やや良	コロボシ形	底部中央部斜	覆土上層	

表9 土坑 (SK) 計測一覧表

施構名	位置 (座標)	平面形態	規模 (cm)			長軸方位	備考 (重複開削)
			長軸 (全長)	短軸 (幅)	残存深度		
SK01	X=38010 ~ 38015 Y=40720 ~ 40725	楕円形	119	(107)	28	N-18°-E	SD05上直痕 (新)
SK02	X=37995 ~ 38000 Y=40720 ~ 40725	楕円形	106	86	20	N-17°-E	
SK03	X=37990 ~ 38000 Y=40715 ~ 40720	長方形	183	93	23	N-15°-E	
SK04	X=37985 ~ 37990 Y=40715 ~ 40720	楕円形	122	(94)	39	N-25°-E	
SK05	X=37995 ~ 38000 Y=40715 ~ 40720	方形	(96)	(70)	7	N-22°-E	

第4節 性格不明遺構

本調査では性格の不明な遺構が3基検出された。共通していることは、ほとんど遺物を含まず褐色灰色粗砂を中心とした覆土を持つことである。形状は不整形で、壁面は直立したり、緩やかに立ち上がるなど一定ではない。2004、2006年の調査では屋敷跡と想定される範囲内に同様な不整形の遺構が検出されており、池跡として報告されている。本調査区も堀内の武家屋敷内に比定されるが、池跡では大量の遺物が検出されることが鑑みると、本遺構を池跡とする根拠に乏しく、本報告では性格不明遺構として掲載する。

1号不明遺構（第4・13図、第10表／図版4）

位置 X=38000～38010、Y=40720～40725内に位置する。

規模と形状 長軸4.93m、短軸1.79m（推定）、残存深度0.47mを測る。平面形態は長円形で、底面は多少起伏があるが概ね平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-19°-Eである。

覆土 10層からなる。褐色灰色細砂が土体で褐色灰色粗砂と交互に堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物出土状況 検出されていない。

所見 時期は不明である。

2号不明遺構（第4・13図、第10表／図版4）

位置 X=37985～37995、Y=40715～40720内に位置する。

規模と形状 長軸3.56m（推定）、短軸1.53m（推定）、残存深度0.25mを測る。平面形態は不整形で、底面は多少起伏があるが概ね平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-21°-Eである。

覆土 2層からなる。褐色灰色粘土ブロックを含む褐色灰色粗砂が土体で、自然堆積と思われる。

遺物出土状況 検出されていない。

所見 時期は不明である。

3号不明遺構（第4・13図、第10表／図版4）

位置 X=37970～37980、Y=40710～40715内に位置する。

規模と形状 長軸3.93m（推定）、短軸1.57m（推定）、残存深度0.33mを測る。平面形態は長円形で、底面は多少起伏があるが概ね平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-19°-Eである。

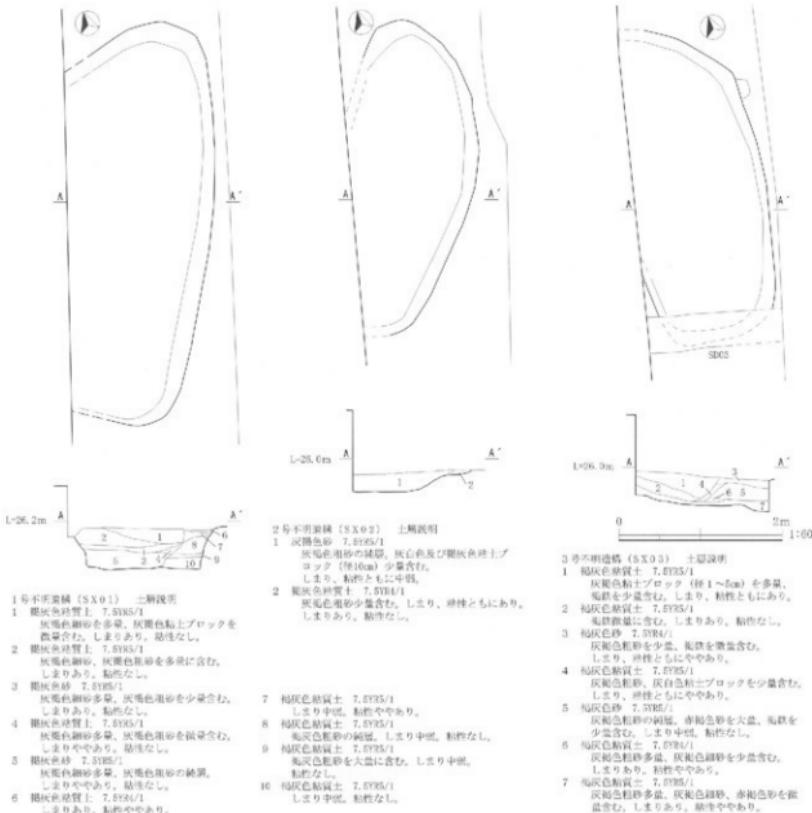
覆土 7層からなる。褐鉄鉱と細砂が混じる褐色灰色粗砂が土体で、自然堆積と思われる。

遺物出土状況 土師質土器片2点（皿2）が出土している。

所見 時期は不明である。

表10 性格不明遺構（SX）計測一覧表

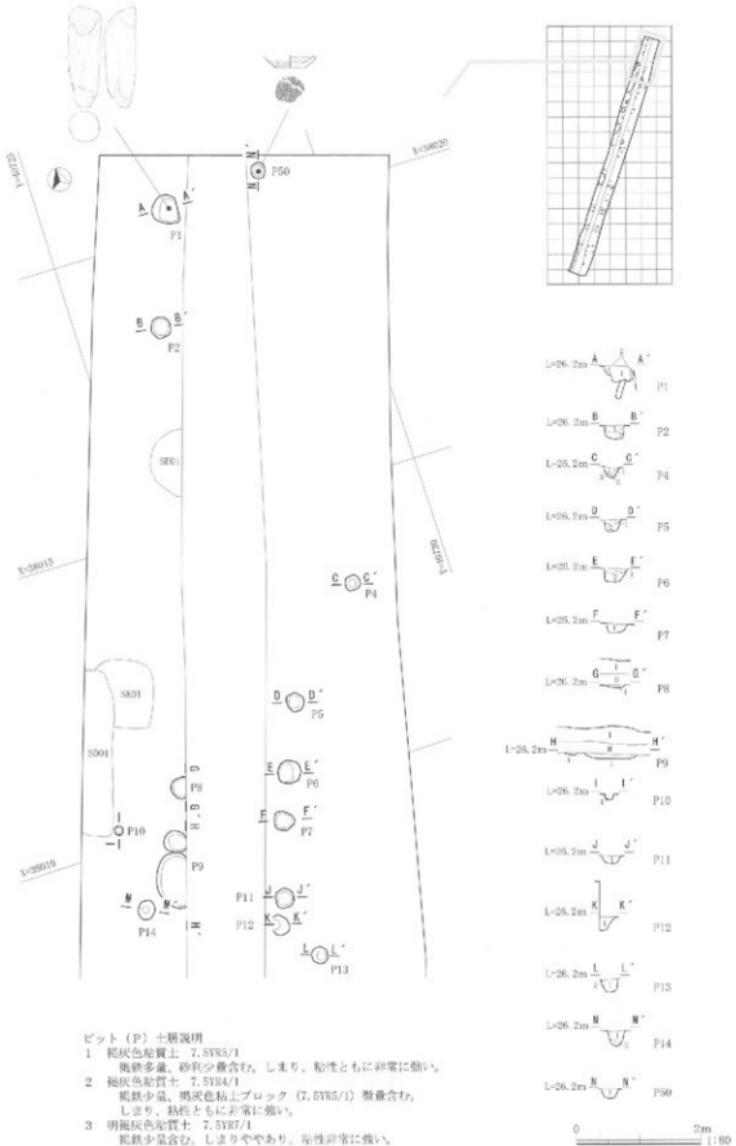
遺構名	位置（座標値）	平面形態	規模(cm)			主軸方位	備考（重複関係）
			長軸（全長）	短軸（幅）	残存深度		
SX01	X=38000～38010 Y=40720～40725	長円形	493	(179)	47	N-19°-E	
SX02	X=37985～37995 Y=40715～40720	小雫形	(356)	(153)	25	N-21°-E	
SX03	X=37970～37980 Y=40710～40715	長円形	(393)	(157)	33	N-19°-E	SD-03と重複



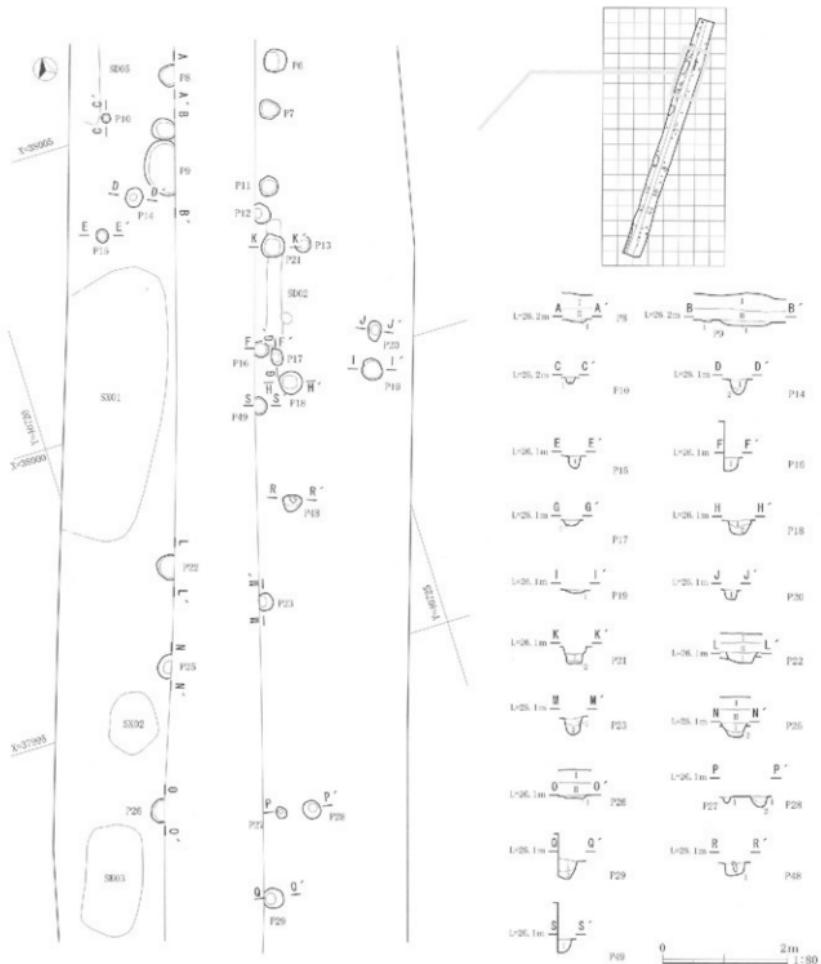
第13図 1号・2号・3号不明遺構 (SX01・02・03)

第5節 ピット群 (第4・14~20図、第13表/図版4~6)

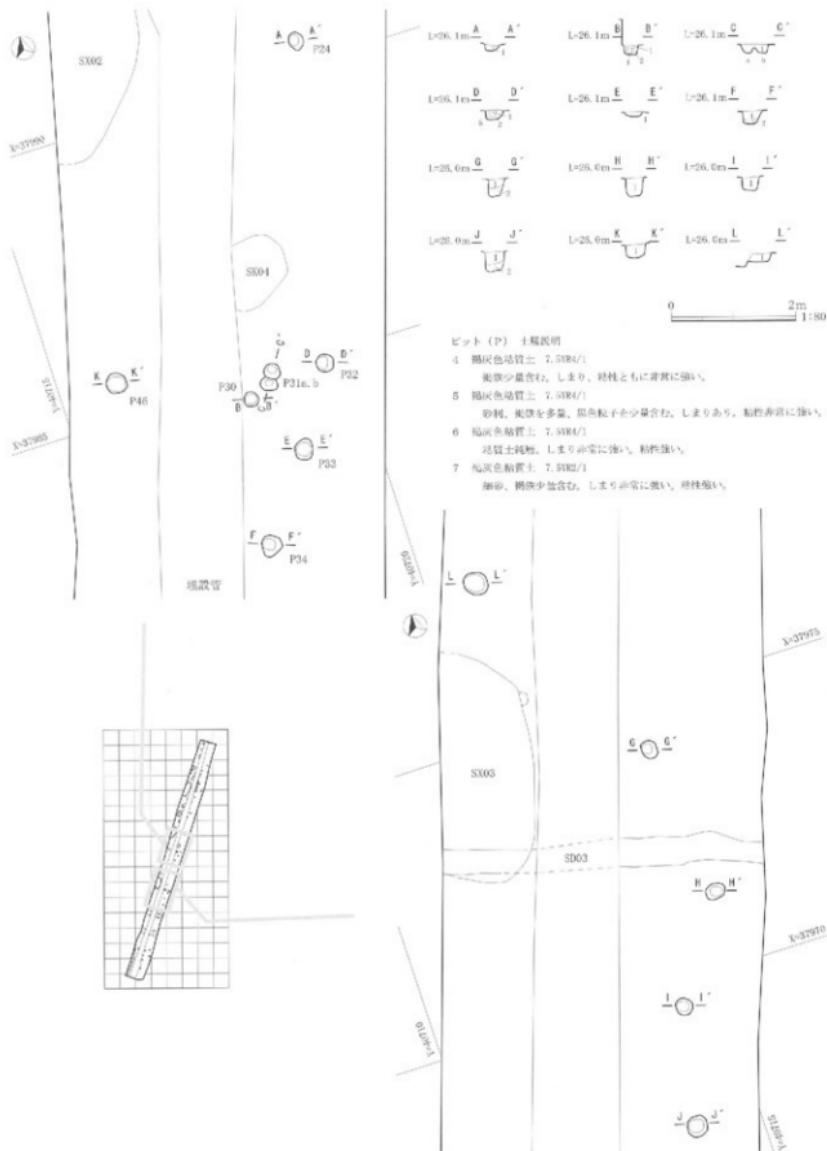
本調査では、ピットは調査区全体から50基検出された。ピットの多くはほとんど重複せず単独で配置されている。ピットは密集するように検出され、一部では一定の間隔で並ぶようにも思われたが、調査区の制約のため掘立柱建物跡や塀跡など建造物を想定させる確実な配列を捉えることはできなかった。2004年、2006年調査で見られたような木柱が残る特徴的なピットは今回の調査で2基検出されたもの (P1・P48)、底面に平石あるいは詰め石をして柱を支える構造をもつ特徴的なピットは今回の調査では検出されなかつた。ピットの形状は円形あるいは楕円形を呈し、長径が20~40cm、短径が15~30cm、残存深度が概ね20cm~30cmのものが多い。底面は平坦なものが主体で、やや丸まるものも見られた。ピットの覆土はおおむね2層



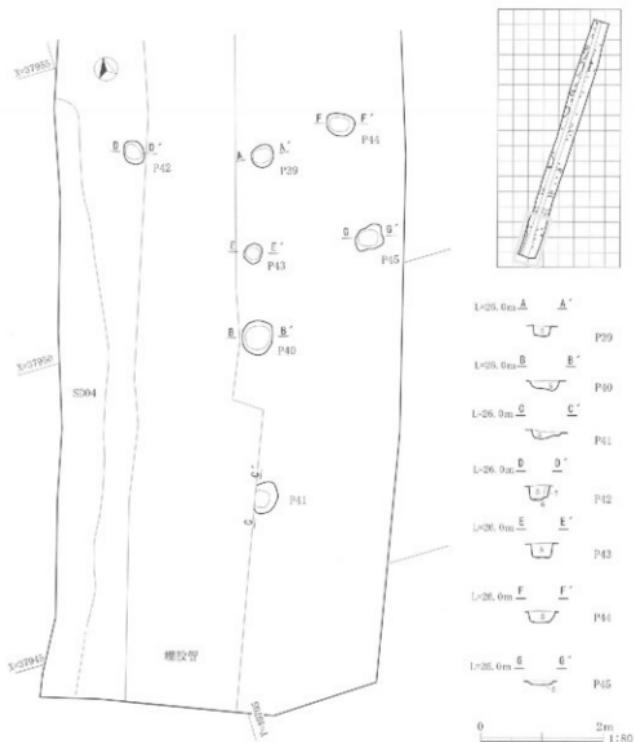
第14図 ピット群(1)



第15図 ピット群(2)



第16図 ピット群(3)



第17図 ピット群(4)

に大別でき、ともに褐色粘質土を主体とする。調査区南側では褐色砂が混じる覆土となるが、これは遺跡の立地が浸食谷の低地にあたるため、ピットが掘り込まれる事業面の位置によって堆積状況が一定ではないことと関連があるものと思われる。また、柱痕跡が確認されるピットが数基見受けられたが、底面が硬化するピットは検出されなかった。P1では掘り込み部分よりも深く木柱が据え付けられているのとは対照的にP48では覆土中に刺さるように検出されており、異なる木柱の据え方が想定できる。

P1・P2を北側へ等間隔に延長した調査区外では、道路工事に伴う表土掘削時にもう1基ピットが未調査ではあるが検出されている。かわらけが出土したP50とあわせ、これらの配列から柱穴列あるいは掘立柱建物跡が想定される。

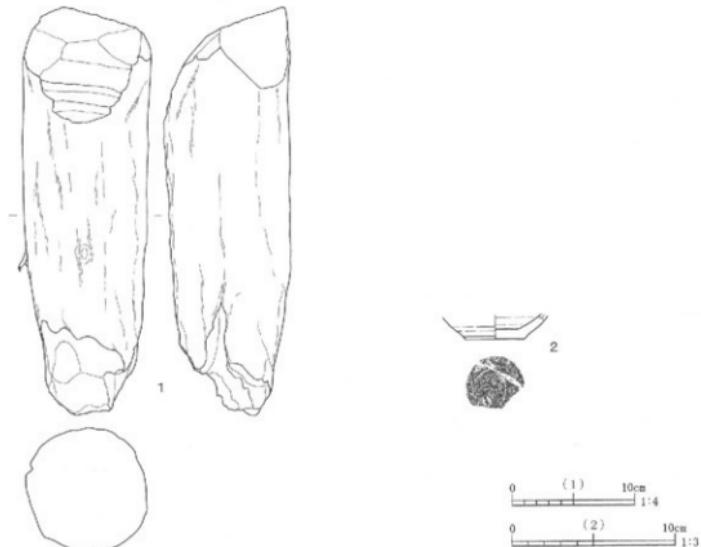
SD02周辺、P21を中心とした範囲は本調査においてもっともピットが集中している部分である(第14・15図)。P48では木柱が検出されている。本調査区が幅狭のため遺構の範囲が捉えきれないが、「宍戸城下絵図」において屋敷の主軸は堀と平行あるいは直行する配置をとることから、これら周辺において柱穴を使用する建造

物あるいは桟の存在が指摘される。

P36～P38は「宍戸城下絵図」によると土塁が位置している場所で検出されている。従って、これらピットは土塁構築時よりも古い時期あるいは土塁構築時の土留め用杭等の可能性が指摘される。

P39～P43は他ピット群に比べまとまりのある集中を見せており、P39～P40間が2.1m、P39～P40間が3.0m、P40～P41間が2.8mの間隔で位置している。これらピット群は柱穴を伴う造構として捉えられる可能性がある。

出土遺物はP1、2、16、43、50から微量ながら土師質土器（皿7点）が出土したほかは検出されなかった。第18図1はP1からの出土である。両端に加工痕が認められ、下方先端部は打ち込み時に磨滅した痕跡が認められた。同図2はP50からの出土で唯一復元できる小型のかわらけである。ピットは中世あるいは近世に比定されるが、こうした出土遺物からその多くは近世宍戸城に付随するものと考えられる。



第18図 ピット(P)出土遺物

表11 ピット(P)出土遺物観察表

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考	
1	木製品	杭	35.3	19.5	10.4	2160	—	打ち込みにより先端磨滅	底面		
番号	種別	器種	口径	高さ	底径	底土・陶胎	色調	模様	手法・文様の特徴	出土位置	備考
2	土師質土器	かわらけ	—	(1.5)	(3.7)	角閃石 雲母 石英 砂粒	にふい 鉛滑 理	やや良	コクロ底形 底部凹凸無調査	覆土中層	

表12 ピット(P)計測一覧表

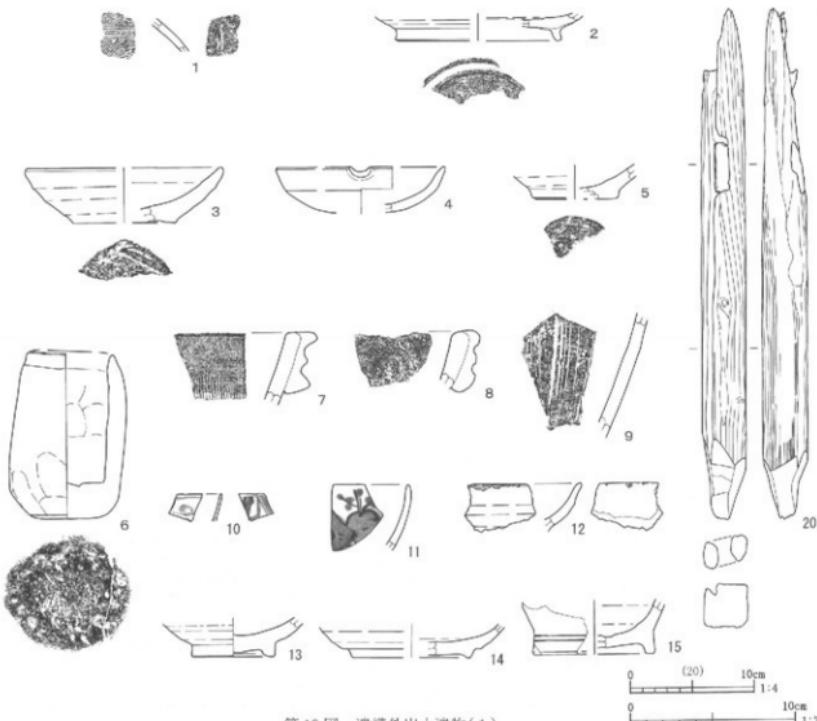
番号	位置(座標値)	平面 形態	直線(cm)			参考 (直線関係)
			長軸 (全长)(cm)	短軸 (幅)(cm)	深さ (高さ)(cm)	
P19	X=37020 ~ 37025	楕円形	49	44	27	
	Y=40725 ~ 40730					木杭深度55cm。 土質質土質山土。
P20	X=37015 ~ 37020	円形	36	31	22	
	Y=40725 ~ 40730					土質質土質山土。
P21	—	—	—	—	—	
						欠番。SF01に変更
P24	X=38010 ~ 38015	楕円形	27	22	20	
	Y=40725 ~ 40730					
P25	X=38010 ~ 38015	円形	30	30	20	
	Y=40725 ~ 40730					
P26	X=38010 ~ 38015	楕円形	38	35	23	
	Y=40725 ~ 40730					
P27	X=38000 ~ 38010	楕円形	35	31	21	
	Y=40725 ~ 40730					
P28	X=38010 ~ 38015	円形	38	25	3	
	Y=40725 ~ 40730					
P29	X=38005 ~ 38010	円形	37	35	3	
	Y=40725 ~ 40730					
P30	X=38010 ~ 38015	楕円形	17	15	30	
	Y=40720 ~ 40725					
P31	X=38005 ~ 38010	円形	33	31	12	
	Y=40720 ~ 40730					
P32	X=38005 ~ 38010	楕円形	31	(24)	22	
	Y=40720 ~ 40730					
P33	X=38005 ~ 38010	楕円形	26	23	23	
	Y=40725 ~ 40730					
P34	X=38005 ~ 38010	円形	23	20	24	
	Y=40720 ~ 40725					
P35	X=38005 ~ 38010	楕円形	24	21	23	
	Y=40725 ~ 40730					
P36	X=38005 ~ 38010	円形	30	19	29	
	Y=40720 ~ 40725					
P37	X=38005 ~ 38010	楕円形	24	21	9	
	Y=40720 ~ 40725					
P38	X=38005 ~ 38010	円形	38	34	23	
	Y=40720 ~ 40725					
P39	X=38005 ~ 38010	楕円形	38	31	5	
	Y=40725 ~ 40730					
P40	X=38005 ~ 38010	円形	38	30	15	
	Y=40720 ~ 40725					
P41	X=38005 ~ 38010	楕円形	36	40	16	
	Y=40720 ~ 40725					
P42	X=37950 ~ 37955	楕円形	46	33	24	
	Y=40700 ~ 40705					
P43	X=37950 ~ 37955	円形	38	38	25	
	Y=40703 ~ 40710					
P44	X=37950 ~ 37955	楕円形	46	37	19	
	Y=40705 ~ 40710					
P45	X=37950 ~ 37955	楕円形	45	37	5	
	Y=40705 ~ 40710					
P46	X=37950 ~ 37955	円形	36	32	24	
	Y=40715 ~ 40720					
P47	X=37975 ~ 37980	楕円形	39	35	13	
	Y=40710 ~ 40715					
P48	X=38000 ~ 38005	楕円形	33	29	20	
	Y=40720 ~ 40725					
P49	X=38000 ~ 38005	楕円形	29	29	23	
	Y=40720 ~ 40725					
P50	X=37020 ~ 37025	円形	28	25	20	
	Y=40720 ~ 40730					

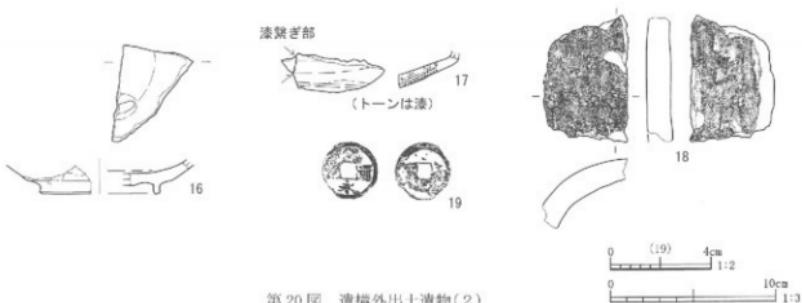
第6節 遺構外出土遺物（第19・20図・第13表／図版6）

本調査では、遺構内出土遺物のほかに遺構確認時等において多くの遺物を検出している。遺構外出土遺物の全体に占める割合は145点中89点(61%)を占める。遺構外出土遺物では中・近世の土師質土器が占める割合が最も多く、89点中52点(58%)である。その内訳は皿43点、内耳鍋6点、焼塙蓋1点(第19図6)、香炉2点である。そのほか、肥前系(第19図11、磁器碗)6点(14.8%)、瀬戸・美濃系(第19図12・13・14・第20図16、天目茶碗、志野皿)3点(3%)、唐津製品(第20図17、碗、向付)2点(2%)、明石・堺系(第19図7・8、描鉢)2点(2%)、常滑(窯)1点、(1%)、青花(第19図10、碗)1点(1%)である。第20図15は初期伊万里の徳利であり、宍戸城廃城直前の様相を呈している。

なお、木製品は第19図20を含め表土掘削時より多く検出されている。その多くは現水田面直下で検出される木杭であり、宍戸城廃城後の水田利用における用水路等の灌溉施設の一部であったものと思われる。

古墳時代の遺物も微量であるが検出され(3点、第19図1・2)、本調査地が西側の丘陵(普光寺跡)から続く生活圏であったことが想定されるほか、明治一大正期の茶碗やおはじきが検出されていることも付記しておく。





第20図 遺構外出土遺物(2)

表13 遺構外出土遺物観察表

番号	種別	形種	口径	溢溝	底径	埴土・粘土	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	番号	
1	土師器	甕	—	(2.6)	—	白色粘 長石・石英	にぶい黄緑 淡黄緑	良好	外面糊脱ナメハケー粘落コニハケ 赤色顔料付青 内面ナゲー磨滅	S字焼B類		
2	須恵器	高台付壺	—	(1.7)	[0.2]	白色砂 透明白砂 泥質骨針	灰	良好	ロクロ成形 高台付壺	木綿下窓		
3	土師質土器	かわらけ	G1.0	3.3	(6.2)	雲母 石英 角閃石	黒	やや良	ロクロ成形 底部凹凸条状撲壓	撒播		
4	土師質土器	かわらけ	—	(2.8)	—	雲母 石英 長石	緑	普通	非ロクロ成形 口縁部片口状に欠け 全体に施墨			
5	土師質土器	かわらけ	—	(2.1)	[4.6]	雲母 砂目	緑	普通	ロクロ成形 底部糊脱系切一撲壓			
6	土師質土器	焼造壺	3.3	10.2	4.7	角閃石 石英 無色透明	にぶい黄緑	良好	輪積み 無然	調査区北側		
7	土師質土器	横持	—	(4.4)	—	雲母 角閃石	緑	良好	輪積 振り目 17条以上	明石・塚		
8	土師質土器	横持	—	(3.8)	—	雲母 角閃石	にぶい橙 にぶい緑	やや良	無輪 振り目 4条以上	明石・塚		
9	土師質土器	横持	—	(7.2)	—	雲母 發結	黄灰 にぶい黄緑	やや不良	輪積 6条1単位の振り目	在地々		
10	青花	碗	—	(1.1)	—	透明釉	灰白	灰白	良好	調査区南側	明代・系德 款空	
11	磁器	碗	—	(4.6)	—	灰釉	灰白	灰白	良好		明洞	
12	陶器	盆	—	(2.9)	—	灰釉	灰白	灰白	良好	瓶戸・美濃 カ		
13	陶器	丸鍋	—	—	—	鍍錫	にぶい黄緑 黒	良好	割り出しによる輪高台 底部糊脱跡	瓶戸・美濃 丸鍋3個		
14	陶器	丸鍋	—	(2.6)	[7.2]	轉食 長石石英	灰白	灰白	良好	高台に砂目無 貫入 滅野	瓶戸・美濃	
15	陶器	泡利	—	(3.3)	[7.6]	長石石英	灰白	灰白	良好	内面無釉 高台に砂目無	新潟伊万堀 カ	
16	陶器	向付皿	—	(2.1)	[7.3]	灰釉	灰白	黒灰	良好	貫入 砂目無 高台糊脱跡 内面砂 土質付青 黏部	瓶戸・美濃	
17	陶器	碗	—	—	—	灰釉	にぶい黄緑 にぶい黄緑	良好	鐵鉢 斷面に塗装が残		廣瀬	
番号	種別	鉢形	径	高さ	幅	厚さ	重ね	材質	切跡牛	特徴	出土位置	番号
18	古鏡	直水滿三	2.3	0.6	1.88	鋼	1636(直水3)年				調査区中	
番号	種別	形種	長さ	幅	厚さ	重ね	材質			特徴	出土位置	番号
19	瓦	丸瓦	(7.0)	(6.1)	(1.5)	89.01	雲母 石英 白色粘					
番号	種別	形種	長さ	幅	厚さ	重ね	材質			特徴	出土位置	番号
20	木製品	建築部材	41.7	3.6	3.6	296.60	—		打ち込みにより先端削減 上部にボゾ穴			

第5章 まとめ

今回の調査では宍戸城に関連する遺構と遺物を多く検出することができた。ここでは、検出された遺構を中心にしてまとめていきたい。

今回の調査区を「宍戸城下絵図」に照らし合わせると、外堀とそれに囲まれた城内的一部分に相当する(第2図)。この位置は堀と土塁をクランク状に配置する郭にあたり、郭東側には木丸に入る大手門が推定されている(『友部町百年史』 1971)。この配置関係からこの郭部分は山入口を守る機能を有する馬出郭と想定される。

調査区南側で横断するSD01はその位置と規模、走行方向から馬出郭を囲う外堀の一部に該当すると考えられる。「宍戸城下絵図」によれば、SD01はこののち本調査区西側で程なく南北方向に走向を変えるようである。SD01から北側に位置するSD03に至るまでの約8mの間には遺構希薄域が確認されている。SD01は北側から埋め戻された様子が堆積状況より見てとれることから、この遺構希薄域には「宍戸城下絵図」に描かれる上塁が存在したものと推測される(第4図)。また、SD03はこの土塁の縁に沿って走る城内の区画溝などの堀や七塁と関連する施設であると考えられる。ただし、SD01と「宍戸城下絵図」に描かれる堀を同規模としてみた場合、描かれる土塁の幅と今回の上塁比定範囲の幅では後者が幅広である。そのため、上塁の正確な規模を確定するためには今後の調査成果を待たなければならない(註1)。

「宍戸城下絵図」によると、区割りされた屋敷内には住人名がそれぞれ記載されている。本調査区が該当する馬出郭内においても区割りされた中に住人名と思われる記載がみられる。また、内堀との境には道路と屋敷を隔てる堀と推測される施設が描かれていることからも、この位置に屋敷があった可能性を示している(註2)。道路に面した方を屋敷地表側とすると、外堀に近い本調査区は屋敷地奥側にあたる。今回の調査では井戸など日常生活に繋がる施設が検出されたが、建物跡が想定できるような規則的に並ぶピットは確認されなかつた。のことから、主屋といった建物跡は本調査区より東側の屋敷地表側に位置するものと想定される。2004年調査報告では「前庭型」の屋敷構成を指摘しているが(註3)、今回の調査では屋敷地奥側と想定され

表14 宍戸城跡出土土器・陶磁器器種別集計表

種別	回復	SD01	SD03	SD01	SD01	SD04	SD01	SD03	P	遺構外	?
土師質十筋	里	3	7	5		6	14	2	7	43	87
	内青銅・鐵片		1		1					6	8
	鐵塊									1	1
瓦質十筋	香炉									2	2
	埴体									1	1
宍戸・美濃	香炉(瓦脚)			1							1
	火口									1	1
	土所皿	1								2	3
	志野紋曲皿			1	1						1
	串襷加賀・白付			1	1						1
	指輪(銀)			2	1					2	3
	缺	1									1
信濃	鏡・白付			1						2	2
信濃	壺			2	1					1	2
不明焼成陶	小瓶			1						14	14
肥前燒成器	碗	1								6	7
青花	碗	1								1	2
	不規			1						7	6
計		7	9	10	1	6	14	2	7	89	145

る部分に井戸や土坑が検出されていることから、城内の屋敷と城外の屋敷ではその屋敷地内構造が若干異なるものと考えられる。また、屋敷境に該当する位置には区画溝が検出されなかつたため、生垣などで区割りとしていた可能性が考えられる。これらのこととは、調査地が馬出郭内部という特異な性格を持つことが影響しているかもしれない。

出土遺物では土師質土器が圧倒的に多く、陶磁器類はごく少量にとどまった（表 14、註 4）。宍戸城の築城は中世に遡るとされているが、出土した在地系の鋸鉢などにその要素が見られるものの多くは近世以降である。陶磁器類の主体である瀬戸・美濃系製品や肥前系磁器は、肥前系磁器が流通し始めた瀬戸・美濃系製品からも体が移り代わるおおむね 17 世紀初頭から中頃のものであった。これは秋田氏が宍戸へ入部し陸奥・春へ移封するまでの期間（1602～1645 年）と重なっており、近世城郭としての宍戸城を良く表している。

以上のように、今回の調査では「宍戸城下絵図」と一致する遺構の配置と出土遺物によって宍戸城の様相の一端が明らかになったといえる。

最後に、宍戸城廃城後に周囲一帯が水田化される様子の一端を示すものとして、SD01 の埋め立て方法をあげておきたい。SD01 を人為的に埋没させている褐色粘土と青灰色粘土の間（第 9 層）、青灰色粘土層と自然堆積層との間（第 11 層）には、厚さ 10cm 程度の植物遺体層が確認された。この植物遺体層は堆積上中にあたかも敷物のように整然と敷いた状態で検出された。こうした様相は調査した SD01 の範囲すべてにおいて確認されており、SD01 調査区外にも同様の埋め戻し方法が行われている可能性が考えられる。特に第 11 層で検出された屋敷で使用されていた衝立あるいは土星上に配置された棚と考えられる偏重状植物遺体も使用しており、意図的な様子が窺える。この植物を利用する工法は、特に地盤がやわらかく安定しない河川改修等に用いられる粗朗工法によく似ている（註 5）。これは軟弱な地盤のもとで水田耕作を行うために、こうした工法で地盤沈下抑止を狙ったものとしてみることができる。

註 1 現存する土塁は本丸のもので北側の土塁幅 10m、南側の土塁幅 12m、西側の土塁幅 6m である。

註 2 「宍戸城下絵図」には各屋敷内に住人名と漢数字が記載されている。稲田氏はこの漢数字を屋敷の広さを示す間数としている（稻田 2004）。今回の調査該当部分にはその記載がない。

註 3 屋敷内を二分し道筋に近い方に池や門、植木・井戸を配し、その奥に土屋を配置する屋敷構造（2004 稲田）。

註 4 出土遺物に関しては稻田氏、中島氏、増田氏の多大なるご教授を戴いた。

註 5 直径数 cm 程度の細い木の枝を集め束状にして資材（適度に細くしなやかなヤナギなどを使用）で地盤の強化を図る工法。現在でも河川改修等で用いられている工法である。

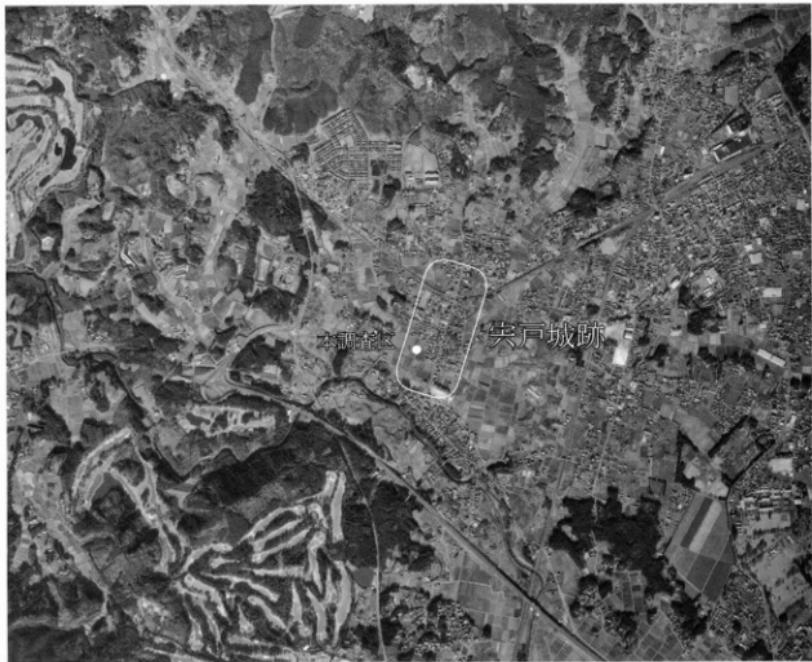
【主要引用・参考文献】

- 阿久津 久他 1979 『日本城郭体系 第 4巻 津城・松木・群馬』 新人物往来社。
平田 憲文 1998 『福島県三春城下町出土の陶磁器』『貿易陶磁研究』第 18 号 日本貿易陶磁研究会
茨城県水戸市立木事務所（財）茨城県教育財團 2006 『新吾寺跡・宍戸城跡 主要地方道大汎久部線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財團文化財調査監督第 256 集
株式会社コメリ「山武考古学研究所」 2006 『宍戸城跡一店舗建設事業に伴う埋蔵文化財緊急調査報告書一』
稲田 弘 2007 『宍戸城跡出土の近世陶磁器』『菟之城一川井正一・斎藤弘道・佐藤正幻先生還暦記念論集一』 菊成版の会
瀬戸市埋蔵文化財センター 2001 『江戸時代の瀬戸・美濃窯』瀬戸市埋蔵文化財センター
机崎 純輔 1999 『常総地域の中世陶磁器と土器』『漁物に見る中世の世界』「高輪貢稼かるさと歴史の広場」森 翼 2000 『豊岡期大坂の美濃焼山窯』『豊岡期のやきもの』土崎市美濃焼歴史館
岩崎 純一他 1994 『丸の内二丁目遺跡』東京都埋蔵文化財センター
源訪問 順 1996 『小川原城出土の中・近世陶器』『貿易陶磁研究』第 16 号 日本貿易陶磁研究会
友部町史編さん委員会 1990 『友部町史』
友部町 友部町商工会 1971 『友部町百年史』
友部町立歴史民俗資料館 2003 『江戸時代の友部地方・宍戸藩一秋田氏と松平氏一』
友部町立歴史民俗資料館 2004 『中世の友部地方一宍戸氏 400 年の歴史一』
企画シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開の羅針～」実行委員会 2005 『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と羅針～ 発表要旨集・資料集』
茨城県教育委員会 2000 『茨城県遺跡地図（地図編）』
小林謙一 1996 『江戸在地系土器と江戸出土土師質塗装の編年（要旨）』『シンポジウム「江戸出土陶磁器・土器の諸問題」II 発表要旨』 江戸陶磁土器研究グループ

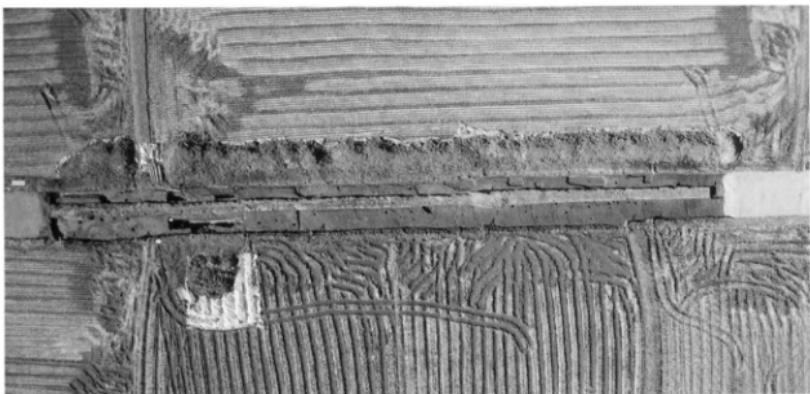
写 真 図 版



本調査区より穴戸城本丸を望む（南西から撮影）



宍戸城跡の位置と周辺の地形（1/3000 国土交通省国土地理院 2003年12月撮影『真岡』）



調査区全景（右が北）

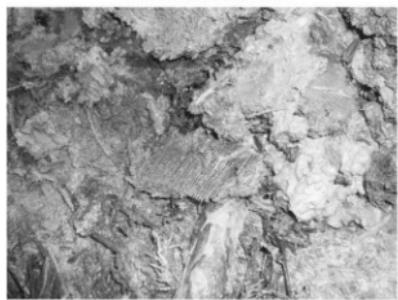
写真図版 2



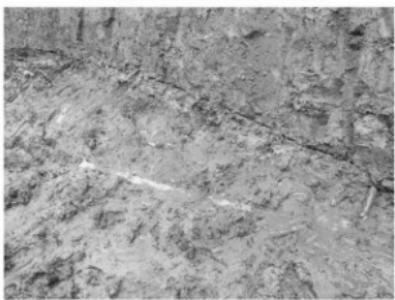
1号溝(堀)跡 (南から)



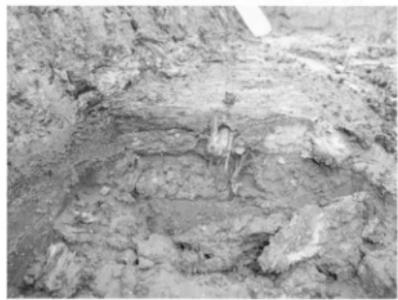
1号溝(堀)跡 土層断面 (南東から)



1号溝(堀)跡 木製品(櫛)出土状況 (南から)



1号溝(堀)跡 植物遺体検出状況 (北東から)



1号溝(堀)跡 植物遺体断面 (南から)



2号溝跡 (北から)



3号溝跡 (東から)



4号溝跡 (南から)



5号溝跡（南から）



1号井戸跡（西から）



1号土坑（東から）



2号土坑（東から）



3号土坑土層断面（南から）



4号土坑（北東から）



5号土坑（西から）



1号不明遺構（南から）

写真図版 4



2号不明遺構（東から）



3号不明遺構（東から）



ピット群1（北東から）



ピット群2（北から）



ピット群3（南から）



1号ピット 木杭検出状況（南から）



1号ピット 半截状況（南から）



基本層序（東から）

写真図版 5

穴戸城跡出土土師質土器・陶磁器



穴戸城跡出土銅製品・古銭

写真図版 6

穴戸城跡出土瓦



SD01 - 5



遺構外 - 19



SD04 - 6



SD04 - 5



穴戸城跡出土木製品



SD01 - 7



SD01 - 8



SD01 - 10



SD01 - 9



P - 1



遺構外 - 20

報告書抄録

ふりがな	ししごじょうあと
書名	宍戸城跡
削書名	古道(友)2026 号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	笠間市文化財調査報告書
シリーズ番号	
著者名	宮川 忠洋
編集機関	(有)毛野考古学研究所
所在地	〒 379-2146 群馬県前橋市公園町 1002番地1
発行年月日	西暦 2009(平成21)年3月13日

所収遺跡	所在地	コード 市町村 演習番号	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
宍戸城跡	笠間市 笠間市 2026 藩池	08216 321042	36° 20' 28"	140° 17' 12"	2008/10/29 ～ 2008/11/21	500 m ²	市道(友)2026 号線 道路改良工事に伴う 緊急発掘調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宍戸城跡	城館	中世 ～ 近世	堀跡1条 築路4条 井戸跡1基 土坑5基 不明遺構3基 ビット50基	土器類(甕) 須恵器(壺、甕) 質易陶磁(青花碗) 瀬戸・美濃(天目茶碗、皿、擂鉢、 志野丸皿、鉄绘皿、铁绘向付、鐵 器皿類) 唐津製品(碗) 肥前系磁器(染付碗) 常滑(甕) 土師質土器(皿、擂鉢、焼塙盃) 瓦質土器(擂鉢、瓦) 吉田・銅製品、瓦 木製品(桶、真板、転用板、継梁部材、 杭ほか)	「宍戸城下絵図」で描か れる遺跡を検出。

現在確認される宍戸城跡は中世末から近世初頭の武家屋敷を中心とする城館跡である。今回の調査では大体午間に作成された「宍戸城下絵図」に見られる遺跡が検出された。また、井戸やビット群が検出され、生活痕跡が確認されている。城跡では土師質土器や陶磁器、木製品が出土したが、特質すべきはその埋め戻し力である。宍戸城築城後、水田化されたと伝えられるが、堀の土を削ってただ埋めるだけではなく少なくとも2度ほど埋め戻し途中に植物を一面に敷いた間層を用いる様子が確認された。現在では特に河川改修等で見られ、水利を良くするための方策である粗朶工法に似た方法で埋め戻し、水田利用のための基盤工事を行っていたとみることができる。

要約

茨城県笠間市
宍戸城跡

印刷 平成 21 年 3 月 7 日

発行 平成 21 年 3 月 13 日

- 編集 有限会社 毛野考古学研究所
〒 379 - 2146 群馬県前橋市公田町 1002 番地 1
電話 (027) - 265 - 1804 F A X (027) - 265 - 5352
- 発行 笠間市教育委員会
〒 309 - 0294 茨城県笠間市石井 717 番地
電話 (0296) - 77 - 1101
- 印刷 有限会社 毛野考古学研究所
朝日印刷工業株式会社
〒 371 - 0846 群馬県前橋市元総社町 67 番地
電話 (027) - 251 - 1212 F A X (027) - 253 - 3475

